



ランブータン（紅毛丹）



《小坡の誕生日》 老舍

(九) 海岸で

もし「小坡はさぼり魔だ」、と言う者がいたら、彼に代わって「そうではない」と言おう。何だって？ さぼり魔だって？ 小坡がまじめに勉強しないと思っていたのかい？ 小坡はどの試験でもいい成績をとっているじゃないか。それに小坡が学校をさぼっているときも、悪いことをしているわけじゃない。葬式行列の見物の時だってそうだけど、小坡は学校に行くとき、ほかの子が自分からはやろうとしない良いことをしたんだ。どういうことかというと……。

小坡が大通りをまっすぐ歩いていたら、物がいっぱい入っている籠を持ったおばあさんが、汗びっしょりになって息をハアハアいわせているのが目に入った。小坡はすぐに近くに寄って行って、何も言わずに籠を取ると頭に載せた。

「どこに住んでるの、おばあさん？」

おばあさんは小坡を一目見ると、彼が心の優しい子供だとわかった。おばあさんは息をまだ息をハアハア言わせながらこたえた。

「広東学校のそばだよ」

「よし。ぼくと一緒に行こう、おばあさん」

シャオボー
小坡は頭に載せた籠を、首をわずかに動かしバランスを取りながら、手を使わずに運んでいった。足をペタペタいわせ、ゆっくりゆっくり歩いていった。おばあさんが疲れていたもので、速く歩こうとしなかったのだ。

おばあさんを家のところまで連れていくと、そこは学校のすぐそばだった。小坡は籠を下ろしておばあさんに渡した。

おばあさんは、小坡にすまないなと思っていた。

「何をお礼したらいいかしらね。アメを買うのに銅貨を二枚あげようか。瓜子グワズのほうがいいかい？」

おばあさんの籠の中には、瓜子の入った袋がいくつかあった。小坡は手と足、頭を同時に振って「いらない」という意思表示をした。おばあさんは小坡のことが大好きになっていたもので、何かあげなくてはられない気持ちだった。

「こうしよう、おばあさん。ぼく、何もいらないよ。でも、ぼくがうっかりして服を汚したときに、きれいにしてくれないかな。そうしたら母さんにしかられないですむから。おばあさんが買い物に行つてぼくを見かけたら、声をかけてちょうだい。おばあさんの籠を運ぶから。ぼく、小坡っていうんだ。母さんが小坡地名の電信柱のところから拾ってきたんで小坡っていうんだ。妹は仙坡っていうんだ。白いひげの仙人が母さんにくれたからだ。南星ナンシンは力持ちなんだよ。張チャントウズ禿子もすごいんだ。でもみんなぼくの頭を怖がっているんだ」

小坡は自分の額をたたいた。

「母さんが言うんだよ。ぼくの頭は千斤は載せることができるって！ ぼくの頭は怖いものなしだ。ただね、怖いのは三多の家のクソジジイの長キセルだけさ。南星の頭にはまだコブが残ってるんだよ」

「はい、はい、もういいよ、もういいよ」

おばあさんは笑いながら言った。

「もの覚えがよくないから、そんないろんなことを覚えてられないんだよ」

^{ナンシン}
「南星のこと、知らないの？」

おばあさんは首を振って言った。

^{シャオボー}
「小坡っていうんだね。ちゃんと覚えたよ。さあ、もう行きなさい。小坡、ありがとうね」

小坡は体をくの字に曲げ頭をさげておばあさんにあいさつしたが、あわてていたので、もう少しで扉に頭をぶっつけるところだった。そして、おばあさんが南星を知らないなんて、不思議だな、と思いながら、学校のほうに歩いていった。

学校に着くと、先生がちょうど国語の「汽船」の課を教えているところだった。先生は小坡が入ってきたのを目にしたが、知らんぷりをしていた。そして小坡が席につくやこう尋ねた。

「小坡、どこに行ってたんだ？」

「おばあさんが荷物を持つのを手伝っていました。とてもかわいそうだったんです、荷物がいっぱい入った籠を持っていて。それで、おばあさんは瓜子^{グワズ}をくれようとしたんですが、もらいませんでした！」

「瓜子が嫌いなんだったら、俺にくれればいいのに！」

^{チャントウーズ}
張 禿子が言った。

「うるさいぞ、張禿子！」先生が大きな声で言った。

^{トゥーズ}
「だめ禿子の張禿子！」

^{シャオイン}
小英はまだ張禿子を恨んでいた。

「しゃべるな、小英！」

先生は大きな声を出して、教壇をむちで何回もたたいた。

「先生一人が騒いでいるみたいですよ」みんなが一斉に言った。

「うんざりだ。ああ、うんざりだ」

先生は頭を振り続けて、またチョークを食べた。食べ終わると、また眠ってしまいそうになった。

「小英^{シャオイン}、先生は何を教えてたんだい？」小坡^{シャオポー}が聞いた。

「汽船^{チャントゥーズ}。張禿子ったら！」

小英はまだ張禿子のことを怒っていた。

「汽船はどこにあるの？」

「本の中。張禿子ったら！」

小坡は急いで本をめくった。あれ、黒い漢字だらけで、汽船の絵なんかどこにもない。小坡は心の中で言った。(汽船のことを教えるのに港に行ってみないなんて、まったくばかげてる。)

「セーン、港に行ったらちょっと汽船を見てきていいですか」と、小坡は先生に許可を求めた。

「先生、おれも行く！」張禿子が行った。

「私も小坡と一緒にいきます。でも張禿子は行っちゃだめ！」小英が言った。「先生。ぼくたちみんなを連れて行ってください」みんなが一斉に叫んだ。

先生は頭を振りながら、「うんざりだ、うんざりだ」と言った。

「海岸は面白いですよ！」小坡はいっしょうけんめい頼んだ。

「うんざりだ」先生は泣かんばかりだった。

「先生、あそこには汽船がいっぱいあります。ねえ、行こうよ。先生！」

みんなが一緒になっていっしょうけんめい頼んだ。

「張禿子は行かせないで、先生！」と小英が言った。

「午後の習字の授業はなしにする。見に行きたいものは行けばいい。ああ、うんざりだ。いまはちゃんと授業を聞きなさい！」

先生がこんなに優しく海岸に行くのを許してくれたのを見て、みんなはすぐに静かになって、安心して授業を聞きはじめた。

シャオポー
小坡を見ると、おやまあ、小坡の真面目な表情ときたらすごいものだ。眉をひそめていて、二つの目は本に釘付けで、二つの^{きり}錐のように、教科書に二つの穴をあけてしまいそうだ。鼻にまでしわを寄せて、お札のもようのようだ。唇はきりっと一文字に結ばれ、上下の歯をぎりぎり^{きり}と噛み合わせ、それにつれてほっぺたがかすかに動いている。耳にゴムの筒がついているように、先生の話だけを集中して聞き、ほかのことは何も聞こえないようだ。片手は本の角に置き、片手は無意識に鼻の下をこすったり、眉毛を引っ張ったり、空中に字を書いたりしていた。両足の十本の指は床をつかんでいた。まるで、床が逃げていくのをおそれている、という風だった。ああ、ほんとうにすごい。こんなにいっしょうけんめいだったので、まるで頭のよこに新しい頭ができたようだった。古い頭の中にあつた^{ナンシン}南星、^{サンドウオ}三多、葬式行列のできごとは、新しい頭の中ではまったく居場所がなかった。新しい頭の中にあるのはただ文字と絵と本だけで、ほかのものはなかった。この新しい頭が出てくるや、心臓はどきどきとしはじめた。「先生の話し^{きり}がわからないかもしれない」「本の中の字をしっかりと覚えられないかもしれない」ということだけが気にかかった。授業終了のベルが鳴るまでずっとこのようなおっかなびっくりした状態で、ベルが鳴ってはじめて、この新しい頭は、はっとして、古い頭と合体し、運動場に飛び出ていった。

授業が終わってから家に帰ってごはんを食べた。食べ終わると急いで学校に戻った。ほっぺたにはごはん粒がひとつ付いたままだった。クラスメートはみんなまだ戻ってきていなかった。彼は先生のところに行った。

「セーン、ぼく、栈橋に船を見にいってきます」

「行きなさい、小坡。早く戻ってくるんだよ。次の授業に遅れないように」

「わかりました。セーン！」

シャオボー

小坡はにこにこしながらかけだしていった。

栈橋は学校から遠くはなく、ちょっと走ったらすぐ着いた。ああ、なんてきれいなんだ！

海はなんてきれいなんだろう！ ほら、遠いところは濃い青色で、水面は真っ平らで、山すそのところだけ、銀の糸のような波が逆巻いている。その一列になった小さな山は深緑色だったが、太陽が雲にさえぎられるとかすかに紫色がかって見え、山の下は緑、上は淡い紅色になり、緑の葉が何輪かのぼらのつぼみを載せているみたいだ。同時に山の下の水がぼら色の上にかぶさると、ぴかぴかと光って紫色がふんわり広がる。小さな船の上の白い帆は赤く染まり、まるで小さな女の子がはにかんでいるときのほっぺたのようだ。

少し近くでは、太陽の光が雲間からさしこみ、海を青緑色に照らしている。新しく芽吹いた柳の葉よりもさらにつややかで柔らかくすべすべした緑だ。そよ風が吹いてくると、みずみずしいその新緑から、小さくて可憐な白い波の花が顔を出す。

さらにもう少し手前に近づくと、緑色はさらに淡くなり、かすかに黄色が見えてくる。

遠くでは深緑だったり淡い紫だったり、近いところでは薄緑だったりつややかな黄色だったり、太陽と雲に遊ばれて色を変える。この世に、こんなにも美しいものがあるのだろうか！

つばめたちは薄緑のところから飛んで飛んで飛んで濃い青色のところまで飛んでいき、山の前で小さな黒い点に変わり、空中で舞い踊っていた。白いかもめたちは東に飛び、西に跳び、とつぜん空中でとまったりした。まるで何か考え事

をしているかのようだ。そして翼を収めて急降下し、緑色の水面で何かわからないが色のついたかたまりをつかんだ。

海岸から近いところは、水はまだ少し緑色をしているが、よく見るとよどんで薄い灰色をしている。小さな船が来ると波が押し寄せてくる。波が堤防の下の黄土色の岩に当たると、白い玉が飛び散って、またザアーと落ちて来る。その音もいい響きだ。

漁船がみんな帆を上げて次から次と進み、ゆっくりと山の下の青い大鏡のような水面のところに行ってしまった。

近くの緑色の水の上には、一列ずつに並んだ大きな木造船がいかりを下ろしていた。帆柱は高くぴったりとくっついて、まるで兵隊さんが長い鉄砲を持って並んでいるようだった。そのほかに、小さな船が何列かに並んでいるのが見えた。船の背が丸くなっていて、一つが別の一つに隣り合っていたので、たくさんの小さなラクダが作った橋のようにも見えたし、背中を丸めた黒い大きな猫の群れのようにも見えた。

小型の蒸気船は、杏色のような黄色いのもあれば薄青色のもあり、全体が黒いのもあればいろいろな色が混ざっているものもあって、あちらにもこちらにも停まっていた。ちょうど荷を積んでいる船もあり、ガーガーガーとクレーンの音を響かせていた。近いところではガーガーガーと聞こえ、遠い所では、小さな山の向こうから響いてくるらしい音がやはりガーガーガーと聞こえてきたが、その音はとても小さかった。船の上には旗が一枚吊してあるのもあり、いろいろな色の旗が串刺しのようにになってはためいているのもあった。煙突の上は煙がもうもうとしていて、黒い煙も白い煙もあった。

ほかにも小さな船が何隻かあって、荷物をいっぱい積んで大きな船のところに進んでいっていた。船の上でかい櫂を漕いでいるのは、赤い布を頭に巻いたインド人

や竹で編んだ大きな笠をかぶった中国人だった。さらに、小さなモーターの付いた船がダダダダと音を立てて行ったり来たりしていて、用もないのにただ忙しそうにしているように見える。

船はすごくいっぱいあった！ 大きい小さいの、背が高いの低いの、かっこうが悪いの、かっこうがいいの、長い短い、など。しかし、それでも海は混んでいるように見えない。船はみんなゆったりと停まっていたり、のんびりと動いていたり、まるで船が多くなればなるほど、海も広がっているようだった。音もいっぱいあった。汽笛の音、汽船の音、クレーンの音、人の声、水の音。でも、少しも耳障りではなかった。これらの音はすべて静かな海の水に吸い込まれ、どんなにうるさくしても、大きな海の荘厳な静けさを乱すことはできないようだった。

ジャオポー
小坡は海岸にしばらく立って見ていた。この景色は見慣れたものだったが、千回見ても一万回見ても見飽きることがなかった。いつもここに来るたびに、小坡は船の数を数えた。しかし一度も全部を数えきることができなかった。一、二、三、四、五……五十。ああ、数がわからなくなってきた。数え直した。五、十、十五、十五足す五はいくつになるかな？ これはやめて八ずつにしよう。一八が八、二八が十六、四八が四十八、五八がええと……。ああ、一生かかっても五八がいくつなのかちゃんと覚えられない！ 五八は百としよう。百だって？ あの小さな船だけだって百よりは多いはずだ。数えきれないよ！

あるとき、父さんが小さなモーターボートに乗せてシンガポール一周をさせてくれたことがあった。小坡はずっと、これらの大きな船も小さな船もみんなシンガポールを回るのだと思っていた。そうでなければ、ここになんでいつもこんなにたくさんの船があるものか。きっと朝に船が出発し、シンガポールを回って、

夜になってもとのところに戻ってくるのだ。それで南星^{ナンシン}と何度も協議して、こう結論を出した。「汽車は直線を走るもので、汽船は回っていくものだ」

「もし小さな船に飛び乗れたら、それからサッと大きな船に飛び移って、そこでいっぱい遊べたら面白いのになあ」

小坡^{シャオポー}は心の中でこう言った。言い終わると、その場で、手を後ろにやり足を曲げ、エイッとばかり遠くに跳んだ。

「よし。栈橋の中にさえ入れれば、それからは絶対にサッと船に飛び乗れる。絶対だ！」

小坡は口の中でぶつぶつ言いながら栈橋に向かって歩いていった。ゲートのところまで行くと、ほかの場所を見る振りをし、鼻歌をふんふんと歌いながら、何にも気が付かないふりをして中に入っていこうとした。

だが、サッと目の前に大きな黒いけむくじゃらの手が伸びてきて、行く手をさえぎった。小坡はその手の持ち主を見なかった。——インド人のガードマンであることはお見通しだ！——小坡は足の親指をひねって体の方向を変えると、独り言を言った。

「本当は入りたくもなかったよ。だってこっちの船小さいし。もっとあっちの大きいやつを見に行くもん」

小坡は海岸に沿って大きなほうの栈橋に行こうと思い立った。「ちょっと遠いな、よし、走るぞ！」そう思うや足に力が入り、一目散に大きな栈橋めがけて駆けていった。

チェッ！一、二、三、四、これだけの門を、みんなガードマンが見張っている！小坡は後ろで手を組み、頭を低くして何回か行ったり来たりした。横目でちらりと見ると、くそ！ガードマンもみんなこっちを見ている。

マレーシア人が一人やってきた。頭の上にランブータン①とバナナなどが入った籠を載せていた。小坡はマレーシア人が怠け者だと知っていたので、寄って行って彼に手を上げてあいさつをして言った。

「ぼくが籠を運んであげましょうか！」

マレーシア人がちょっと口を開けると、真っ白い歯が何本か見えた。そのマレーシア人は何も言わずに、小坡の頭に籠を載せた。小坡は意気揚々と足を高く上げて、門の中に入っていった。小坡にもどうしてだかよくわからなかったが、こんなふうにならぬために仕事をすると、いつもとってもいい気分になるのだった。

わあー、何てにぎやかなんだ。物売り人がいっぱいいる。赤いスカートをはいたインド人の子供が、色とりどりのきれいな果物を頭の上に載せている。小さな黒い帽子をかぶったアラブ人はお金の入った袋を持って、人を見るとすぐに「両替は？」と声をかけている。マレーシア人の中にはいくつもの葉巻の箱を抱えている者や大きなドリアンを手をしている者もいる。地面には露天商の屋台、おもちゃ、歯ブラシや歯磨き、ピーナツ、スカーフ、銅のボタン……色とりどりでとっても派手でにぎやかだ。

小坡は籠を下ろした。マレーシア人はランブータンなどの商品をみんな地面に並べ、そのそばにしゃがんだが、呼び込みの声を上げるわけでもなく客の応対をするわけでもなく、売れようが売れまいが自分には関係ない、といったようすだった。

小坡は地面の上の商品をつぶさに観察した。マレーシア人が並べている物の中でいちばん気に入ったのは、大きな貝殻だった。二冊の郵便切手帳もおもしろかったが、貝殻に比べるとぜんぜん大したことはない。小坡は心の中で言った。もし、ここにある物をただでもらえるんだったら、絶対にこの点々の模様が付いていて、ギザギザのある、くるくる巻いている殻が付いているやつをもらおうぞ！

残念だな。ここにあるのはただではもらえない。待ってろよ、大きくなってお金ができれば、十個も八個も買ってやる。でも、何歳になったら大人になれるんだろう？

さすがここはすごい！ 汽船って大きいんだな！ どの船も長くて、三階建てのでっかいビルのようだ。煙突を見ろよ、大きな木よりも太いし、小さな塔よりも高い！

一、二、三、四……また数え切れなくなったよ！

岸に停まっている船を見ろよ！ 人が乗ったり降りたりして、前にも後ろにもクレーンがあってガーガー鳴っている。船のそばで、小さくてまるい穴からザーザーと水が外に流れている。何ておもしろいんだ！ うーん、どうすれば船の上に乗って見られるのかな？ 小坡はちょっと考えて、あのマレーシア人のところに行ってこう言った。「ぼくがランブータンを持って行って船の上で売ってきますよ。いいでしょう？」

マレー人はだめだというように首を振った。小坡はがっかりして、大きな船の跳ね板のところまで行ってチャンスを待った。

跳ね板のところでは二人の男が見張っていた。これは難しいぞ。待つんだ、ただ待つしかない！

しばらくすると、二人のうちの一人が船の中に入っていった。小坡の二つの黒い瞳は、小さな花が咲いたようにぱっと輝き、心の中でこう言った。「見込みはあるぞ！」

小坡はゆっくりと跳ね板のところへ近寄っていった。そしてフンフンと鼻歌を歌いながら鉄の柵をなでた。男が小坡をちらりと見た。小坡は鉄の柵をなで鼻歌を歌いながら、跳ね板のところから数歩遠ざかり、また近づいていき、鉄柵にもたれて海を見ている振りをした。ああ、小さな魚がいるぞ。頭を上げて船を見て

いる振りをした。ああ、大きな船は全身が目だ。おもしろいな！——小坡は船室の窓を目と呼んだのだ。

小坡は横目であの見張りの男を見た。ああ、びくともせずと同じところに立っている。ミカンを百個あげてもそこを離れはしないだろう。小坡はあせってきた。絶対に、船の上に乗って見ないわけにはいかないのだ！

地面にミカンの皮が落ちていた。小坡は船を見ながら、そっと足を使ってミカンの皮を押し去っていった。ゆっくりゆっくりと、男の脚の後ろまで押し去っていった。「わー！大変だ！」

小坡はとつぜん空を指さしてこう言うと、ぱっと駆けだした。男は何が起こったのかわからないまま空を見上げて走り出した。彼が走りだすや、すぐに小坡は空を指さしながら戻ってきた。男も上を向いたまま急いで戻ってきた。とそのとき、男はミカンの皮を踏んでつるりと滑りどすんと転んだ。

小坡はサッと跳ね板に飛び乗った。

船に入ると、小坡は背を伸ばしてゆっくりと大股で歩いていった。船の上の人はみな、このように子供が堂々と歩いているのを見ると、乗り込んできた乗客だと思い、だれも気にとめなかった。小坡は気分爽快だった。

へえ、船は家と同じなんだ！ 一つ一つの小さな白い壁の部屋、ベッドがあり扇風機があり洗面台がある。水の上に住むなんて、なんて面白いんだろう！ 待ってろよ、大きくなったら、ぼくもこんな家をつくるんだ。父さんがぼくをぶとうとしたら、そのときは、ほーら、すぐに水の上の家について何日か暮らすんだ！ 食堂もあるぞ！ 絨毯が敷いてあって四方が大きな鏡だ！ 鏡を見ながらご飯を食べる、自分の口が開いたり閉じたりするのを見ながら、これも面白そうだ！ 床屋さんもあるぞ！ 海の上で髪を刈って、それから海に飛び込んで頭を洗うと、

ぜったいに気持ちがいいぞ！　それが済んだら、食堂に言ってカレー味の鶏肉とか食べるんだ。何て自由なんだ！

シャオボー
小坡はひと部屋ひと部屋をのぞき、最後の休憩室までずっと見ていった。休憩室にはピアノがあるぞ！　おばあさんが何人かいて字を書いている。そうか、ここは船の上の学校なんだ。急いで隠れないといけない。つかまえられたら字を書かせられる。ぜったい嫌だ！

小坡はぐるりと向きをかえ船尾に行った。おお、この小さな部屋は何だ！　中に大きな車輪や小さな棒があって、トントントンと音がしている。水の上の家には工場があるんだ。面白いな。ぼくが水の上の家を作っても、工場なんか要らない。そこに穴を開けるほうがいい。海にまっすぐ通じていて、ひまなときにはそこから釣りができるなんて、すごくいいぞ。

小さな部屋のとなりに小さなはしごがあったので、上ってみた。何と上にももう一階ある。両側に小さな部屋があって食堂もある……帰ったら南星^{ナンシン}に教えてやろう。南星はこんなの見たことないから。そのうち南星が汽車のことを話したら、ぼくは水の上の家のことを話してやるんだ。

この鉄のやつを見て。大きな木箱や大きなジュートの袋をゆらゆらさせながら空中に引き上げている。この人たちは何てがやがやしてるんだ。何を引っ張っているのかわからないけれど、とっても面白い！

手すりのところで見てみよう。遠くの小さな山や下に見える海の表面も、港で見たのよりずっときれいだ。船が一つ動き出した。ポーポー！　汽笛が鳴っている。船に乗っている人がみんな小坡に手を振っているようだったので、彼も手を振った。見て、船の尻尾が白い波を引きずっている、何てきれいなんだ！　——見て、白い鳥がいっぱい船と一緒に飛んでいる。何て面白いんだ！

楽しく見ていたちょうどそのとき、後ろから大きな手が伸びてきて、小坡シャオポーの上着のえりをつかんだ。振り返ると、しまった。あの跳ね板を見張る男だ！男は何も言わずに小坡をつかんだまま連れていった。小坡は一言も発せず、足は空中にぶら下がって垂れている。これもとっても面白かった。跳ね板から降りると男は手を放した。小坡は尻餅をついた。

「ありがとうございました！」と、小坡は振り向いて男に言った。

①東南アジアで見られるライチやリュウガン（竜眼）と同じムクロジ科の果実。



（中国語語原文）

（九）海 岸 上

设若有人说，小坡是个逃学鬼儿，我便替小坡不答应他！什么？逃学鬼儿？哼，你以为小坡不懂得用功吗？小坡每逢到考试的时候，总考得很好咧！再说，就是他逃学的时候，他也没凿坏事呀！就拿他看殡说吧，他往学校走的时候，便作了件别个小孩子不肯做的好事。那是这么一档子事：他不是正顺着大马路走吗，唉，一眼看见个老太太，提着一筐子东西，累得满头是汗，吁吁带喘。小坡一看，登时走过去，没说什么，抢过筐子便顶在头上了。

“在那儿住哇，老太太？”

老太太一看小坡的样儿，便知道他是个善心的孩子，喘着说：

“广东学校旁边。”

“好啦，跟着我走吧，老太太！”小坡顶着筐子，不用手扶，专凭脖子微动，保持筐子的平稳。两脚吧唧吧唧的慢慢走，因为老太太走道儿吃力，所以他不敢快走。

把老太太领到家门口——正在学校的旁边，小坡把筐子拿下来，交给老太太。

“我怎么谢谢你呢？”老太太心中很不过意：“给你两个铜子买糖吃？还是给你一包瓜子儿？”老太太的筐中有好几包瓜子。

小坡手、脚、脑袋一齐摇，表示决定不要。老太太是很爱他，非给他点东西不可。

“这么办吧，老太太！”小坡想了一会儿，说：“不用给我东西，赶明儿我不留心把衣裳弄脏了的时候，我来请你给收拾收拾，省得回家招妈妈生气，好不好？你要是上街买东西，看见了我，便叫我一声，我好替你拿着筐子。我叫小坡，是妈妈由小坡的电线杆旁边捡来的。妹妹叫仙坡，是白胡子老仙送给妈妈的。南星很有力量，张秃子也很厉害，可是他们都怕我的脑袋！”小坡拍了拍脑门：“妈妈说，我的头能顶一千多斤！我的脑袋不怕别的，就怕三多家中糟老头子的大烟袋锅子！南星头上还肿着呢！”

“哎！哎！够了！够了！”老太太笑着说：“我的记性不好，记不住这么些事。”

“不认识南星？老太太！”小坡问。

老太太摇了摇头，然后说：“你叫小坡，是不是？好，我记住了。你去吧，小坡，谢谢你！”

小坡向老太太鞠躬，过于慌了，脑袋差点碰在墙上。

“老太太不认识南星，真奇怪！”小坡向学校里走。

到了学校，先生正教国语教科书的一课——轮船。

看见小坡进来，先生假装没看见他。等他坐好，先生才问：

“小坡，上哪儿啦？”

“帮着老太太拿东西来着，她怪可怜的，拿着满满的一筐子东西！她要给我一包瓜子儿，我也没要！”

“你不爱吃瓜子，为什么不给我带来？”张秃子说。

“少说话，张秃子！”先生喊。

“坏秃子！张秃子！”小英还怀恨着张秃子呢。

“不准出声，小英！”先生喊，教鞭连敲讲桌。

“听着先生一个人嚷！”大家一齐说。

“气死！哎呀，气死！”先生不住摇头，又吃了个粉笔头儿。吃完，似乎又要睡去。

“小英，先生讲什么呢？”小坡问。

“轮船。张秃子！”小英始终没忘了张秃子。

“轮船在哪儿呢？”小坡问。

“书上呢。张秃子！”

小坡忙掀开书本，哎！只有一片黑字儿，连个轮船图也没有。他心里说，讲轮船不到码头去看，真有点傻！

“先——！我到码头上看看轮船去吧！”小坡向先生要求。

“先生——！我也去！”张秃子说。

“我也跟小坡去！不许张秃子去！”小英说。

“先生——！你带我们大家去吧！”大家一齐喊。

先生不住的摇头：“气死！气死！”

“海岸上好玩呀，先——！”小坡央告。

“气死！”先生差不多要哭了。

“先生，那里轮船很多呀！走哇！先生！”大家一齐央告。

“不准张秃子去呀，先生！”小英说。

“下午习字课不上了，谁爱看轮船去谁去！哎呀，气死！现在好好地听讲！”先生说。

大家看先生这样和善，允许他们到海岸去，立刻全一声不发，安心听讲。

你们看小坡！嘴！眉毛拧在一块儿，眼睛盯着书本，像两把小锥子，似乎要把教科书钻两个窟窿。鼻子也抽抽着一块，好像钞票上的花纹。嘴儿并得很严，上下牙咬着动，腮上微微地随着动。两耳好似挂着条橡皮筒儿，专接受先生的话，不听别的。一手按着书角，一手不知不觉的有时在鼻下搓一阵，有时往下撕几根眉毛，有时在空中写个字。两脚的十指在地上抓住，好像唯恐地板跑了似的。嘴！可了不得！！这样一用心，好像在头的旁边又长

出个新脑袋来。旧头中的南星、三多、送殡，等等事故儿，在新头中全没有地位，新头中只有字，画，书。没有别的。这个新头一出来，心中便咚咚的跳：唯恐听不清先生的话，唯恐记不牢书上的字。这样提心吊胆的，直到听见下堂的铃声，这个新头才“梆”的一下，和旧头联成一气，然后跳着到操场去玩耍。

下课回家吃饭。吃完，赶快又跑回学校来，腮上还挂着一个白米粒儿。同学们还都没回来，他自己找先生去：

“先——，我到码头看轮船去了！”

“去吧，小坡！早点回来，别误了上第二堂！”

“听见了，先——！”小坡笑着跑出来。

码头离学校不远，一会儿就跑到了。嗨！真是好看！

海水真好看哪！你看，远处是深蓝色的，平，远，远，远，一直到一列小山的脚下，才卷起几道银线儿来，那一系列小山儿是深绿的，可是当太阳被浮云遮住的时候，它们便微微挂上一层紫色，下面绿，峰上微红，正像一片绿叶托着几个小玫瑰花蓓葵。同时，山下的蓝水也罩上些玫瑰色儿，油汪汪的，紫溶溶的，把小船上的白帆也弄得有点发红，好像小姑娘害羞时的脸蛋儿。

稍近，阳光由浮云的边上射出一把儿来，把海水照得碧绿，比新出来的柳叶还娇，还嫩，还光滑。小风儿吹过，这片娇绿便摺起几道细碎而可怜儿的小白花。

再近一点，绿色更浅了，微微露出黄色来。

远处，忽然深蓝，忽然浅紫；近处，一块儿嫩绿，一块儿娇黄，随着太阳与浮云的玩弄，换着颜色儿。世上可还有这样好看的东西！

小燕儿们由浅绿的地方，飞，飞，飞，飞到深蓝的地方去，在山前变成几个小黑点儿，在空中舞弄着。

小白鸥儿们东飞一翅，西张一眼，又忽然停在空中，好想盘算着什么事儿；又忽然一振翅儿，往下一扎，从绿水上抓起一块带颜色的东西，不知

道是什么。

离岸近的地方，水还有点绿色；可是不细看，它是一片油糊糊的浅灰，小船儿来了，挤起一片浪来，打到堤下的黄石上，溅起许多白珠儿。哗啦哗啦的响声也很好听。

渔船全挂着帆，一个跟着一个，往山外边摇，慢慢浮到山口外的大蓝镜面上去。

近处的绿水上，一排排的大木船下着锚，桅杆很高，齐齐地排好，好似一排军人举着长枪。还有几排更小的船儿，一个挨着一个，舱背圆圆的，好像联成一气的许多小骆驼桥儿，又好像一群弯着腰儿的大黑猫。

小轮船儿，有的杏黄色，有的浅蓝色，有的全黑，有的杂色，东一只西一艘地停在那里。有的正上货，哗啦，——哗啦，哗，——鹤颈机发出很脆亮的响声。近处，哗啦，哗啦，哗——；远处，似乎由小山那边来的，也哗啦，哗啦，哗——，但是声音很微细。船上有挂着一面旗的，有飘着一串各色旗的。烟筒上全冒着烟，有的黑嘟嘟的，有的只是一些白气。

另有些小船，满载着东西，向大船那边摇。船上摇桨的有裹红头巾的印度，有戴大竹笠的中国人。还有些小摩托船嘟嘟地东来西往，好像些“无事忙”。

船太多了！大的小的，高的矮的，丑的俊的，长的短的。然而海中并不显出狭窄的样儿，全自自然然地停着，或是从容地开着，好像船越多海也越往大了涨。声音也很多，笛声，轮声，起重机声，人声，水声，然而并不觉得嘈杂刺耳，好似这片声音都被平静的海水给吸收了去，无论怎么吵也吵不乱大海的庄严静寂。

小坡立在岸上看了一会儿。虽然这是他常见的景物，可是再叫他看一千回，一万回，他也看不腻。每回到此处，他总想算一算船的数目，可是没有一回算清过。一，二，三，四，五，……五十。哼，数乱了！再数：一五，一十，十五，十五加五是多少？不这样干了，用八来算吧！一八，二八十六，四八四十八，五八——！噫！一辈子也记不清五八是多少！就算五八是一百

吧，一百？光那些小船就得比一百还多！没法算！

有一回，父亲带他坐了个小摩托船，绕了新加坡一圈儿。小坡总以为这些大船小船也都是绕新加坡一周的，不然，这里哪能老有这么多船呢？一定是早晨开船，绕着新加坡走，到晚上就又回到原处。所以他和南星商议过多少次，才决定了：

“火车是跑直线的，轮船是绕圈儿的。”

“我要是能跳上一只小船去，然后，哧！再跳到一只大船上去，在船上玩半天儿，多么好！”小坡心里说，说完，在海岸上，手向后伸，腿儿躬起，哧！跳出老远。“行了，只要我能进了码头的大门，然后，哧！一定能跳上船去！一定！”他念念叨叨地往码头大门走。走到门口，小坡假装看着别处，嘴里哼唧的，“满不在乎”似的往里走。

哼！眼前挡住只大黑毛手！小坡也没看手的主人，——准知道是印度巡警！——大拇脚指头一捻，便转过身来，对自己说：“本不想进去吗！这边船小，咱到那边看大的去！”他沿着海岸走，想到大码头去：“不近哪，来，跑！”心里一想，脚上便加了劲，一直跑到大码头那边。

哼！一，二，三，四，那么些个大门全有巡警把着！

他背着手儿，低着头，来回走了几趟。偷眼一看，哼！巡警都看着他呢。

来了个马来人，头上顶着一筐子“红毛丹”和香蕉什么的。小坡知道马来人是很懒的，于是走过去，给他行了个举手礼，说：“我替你拿着筐子吧？先生！”

马来人的嘴裂开一点，露出几个极白的牙来。没说什么，把筐子放在小坡的头上。小坡得意扬扬，脚抬得很高，走进大门。小坡也不知为什么，这样白替人做工，总觉得分外的甜美有趣。

嗨！好热闹！卖东西的真不少：穿红裙的小印度，顶着各种颜色很漂亮的果子。戴小黑盔儿的阿拉伯人提着小钱口袋，见人便问“换钱”？马来人有的抱着几匣吕宋烟，有的提着几个大榴莲。地上还有些小摊儿，玩意儿，牙刷牙膏，花生米，大花丝巾，小铜钮子……五光十色的很花哨。

小坡把筐子放下。马来人把“红毛丹”什么的都摆在地上，在旁边一蹲，也不吆喝，也不张罗，好似卖不卖没什么关系。

小坡细细地把地上的东西看了一番，他最爱一个马来人摆着的一对大花蛤壳儿。有两本邮票也很好玩，但是比蛤壳差多了。他心里说：假如这些东西可以白拿，我一定拿那一对又有花点，又有小齿，又有弯弯扭扭的小兜的蛤壳！可惜，这些东西不能白拿！等着吧，等长大了有钱，买十对八对的！几儿才可以长大呢？……啊！到底是这里，轮船有多么大呀！都是长，长，长的大三层楼似的玩意儿！看烟筒吧，比老树还粗，比小塔儿还高！

一，二，三，四，……又数不过来了！

看靠岸这只吧！人们上来下去，前后的起重机全哗啦啦的响着，船旁的小圆窟窿还哗哗的往外流水，真好玩！哎呀，怎能上去看看呢？小坡想了一会儿，回去问那个马来人：“我拿些‘红毛丹’上船里卖去，好不好？”

马来人摇了摇头。

小坡叹了口气，回到大船的跳板旁边去等机会。

跳板旁有两个人把着。这真难办了！等着，只好等着！

不大一会儿，两个人中走去了一个。小坡的黑眼珠里似乎开了两朵小花，心里说：“有希望！”慢慢往前凑合。手摸着铁栏杆，嘴中哼唧着。那个人看了他一眼，他手摸着铁栏，口中哼唧着，又往回走，走了几步，又往前凑。又假装扶在铁栏上，往下看海水：嗨，还有小鱼呢。又假装抬起头来看船：哼，大船一身都是眼睛，可笑！——他管舱房的小圆窗叫眼睛。他斜着眼看了看那个人，哼！纹丝儿不动，在那里站着，好象就是给他一百个橘子，他也不肯躲开那里！小坡真急了！非上去看看不可！

地上有块橘子皮，小坡眼看着船身，一脚轻轻的推那块皮，慢慢，慢慢，推到那个人的脚后边。

“嗨！可了不得！”小坡忽然用手指着天，撒腿就跑。

那个人不知是怎么了，也仰着头，跟着往前跑，他刚一跑，小坡手还指着天，又跑回来了。那个人，头还是仰着，也赶紧往回跑：嘿！嗨——梆！

他被橘子皮滑出老远，然后老老实实在地上。

小坡“刺溜”的一下，跑上跳板去了。

到了船上，小坡赶快挺直了腰板，大大方方的往里走。船上的人们一看这样体面的小孩，都以为他是新上来的旅客，也就不去管他。你看，小坡心里这个痛快！

哟！船上原来和家里一样啊！一间一间的小白屋子，有床，有风扇，有脸盆架儿。在水上住家，这够多么有意思呢！等着，长大了我也盖这么一所房子，父亲要打我的时候，咦，我就到水房子里住几天来！还有饭厅呢！地上铺着地毯，四面都有大镜子！照着镜子吃饭，看着自己的嘴一张一闭，也好玩！还有理发所呢！在海上剪剪发，然后跳到海中洗洗头，岂不痛快！洗完了头，跑到饭厅吃点咖喱鸡什么的，真自在呀！

小坡一间一间的看，一直看到后面的休息室。这里还有钢琴呢！有几个老太太正在那里写字。啊，这大概是船上的学校，赶紧躲开她们，抓住我叫我写字，可不好受！

转过去，已到船尾。哈，看这间小屋子哟！里面还有大轮子，小棍儿的，咚咚地直响。水房子上带工厂，可笑！我要是盖水房子呀，一定不要工厂：顶好在那儿挖个窟窿，一直通到海面上，没事儿在那里钓鱼玩，倒不错！

小屋的旁边有个小窄铁梯，上去看看。上面原来还有一层楼呢。两旁也都是小屋子，又有一个饭厅……回去告诉南星，他没看见过这些东西。赶明儿他一提火车，我便说水屋子！

看那个铁玩艺儿，在空中忽悠悠地往起拉大木箱，大麻口袋。看这群人们这个嚷劲！不知道拉这些东西干什么，但是也很有趣味！

扶在栏杆上看看吧。远处的小山，下面的海水，看着更美了，比在岸上看美的多！开了一只船，闷——闷！汽笛儿叫着。船上的人好象都向他摇手儿呢，他也向他们摇手。看船尾巴拉着那一溜白水浪儿，多么好看！——看那群白鸟跟着船飞，多么有意思！

正看得高兴，背上来了只大手，抓住他的小褂。小坡歪头一看，得！看

跳板的那个家伙！那个人一声没发，抓起小坡便走；小坡也一声不发，脚在空中飘摇着，也颇有趣味。

下了跳板，那个人一松手，小坡摔了个“芥末蹲儿”。“谢谢你啊！”小坡回着头儿说。

(『中国名家经典童话—老舍选集』 同心出版社，北京，2009，pp. 91-102.)

